

窯の中で千三百度に溶けたガラスの種。細長い管に、オレンジ色の液体となった種を巻き取り、息を吹き込みながら型に落とす。数人一組の作業。誰も、ひと言も発しない。ひたすら静かに、リズムカルに、ガラスが形となっていく。

東京・下町にある松徳硝子(村松邦男社長)。大正期に電球用ガラス工場として創業し、現在は熟練職人による手作りガラス食器メーカーとして知られる。椎谷恒彦さん(67)はこのガラス職人見習いだ。



タンブラーの底を整える椎谷恒彦さん。「底がだんだんになっていたり、丸くなったら格好悪い。底はびしょとしていなくちゃ」

—東京都墨田区の松徳硝子の工場

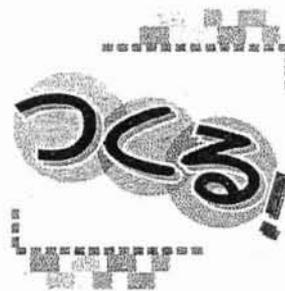
れど、工場で働いてみたかった」という「変わり種」だ。

ているからだ。例えば、同社が生産する「う

### 手作りガラス職人見習い 椎谷恒彦さん

# 腕を上げることに専心

職人の仕事は毎日と同じ作業の繰り返し。決められたものを、決められた手順で作る。そこに自分の「表現」を盛り込むことは許されない。でも今は「腕を上げる」ことだけに心が向いている。「それはすべての基本的なこと、根っこの部分」と感じ



すは(薄玻璃)という極薄のガラスがある。海外でも評価が高い「芸術品」と呼べるガラス工芸品だ。だが価格が数百〜数千円と普段遣いができる範囲

に抑えられているのは、量産でできるからこそである。重量が一つ数十gのうすはり、種を巻き取る量が十g違っても出来上がりに影響する。重量も、吹く息の量も、タイミングも、量産品ながら、すべて職人の経験値と五感だけが頼り

だ。

「何人もの人が同じレベルの技術を、毎日キープし、同じ質の商品を作ると言うのは、実は大変なこと。手びねりだから、同じものは作れない」というような言い訳めいたことが言えない世界だから」と椎谷さん。

椎谷さんは、うすはりを吹くことはまだ許されていない。だが「椎谷は向上心が強い。いつも自分の吹いたガラスの重量を量り、手触りを確認して感覚を蓄積しようとしている」と村松社長。椎谷作のうすはりが生まれるのもそう遠い日ではなさそうだ。



四月下旬発売された続編「子育てハッピーアドバイス②」は、パート1と同様にオールカラー、文字が大きく簡潔な文章で要点が記されている。『やればできるのに』と励ましても効果がないのは、なぜか。著者は精神科医であり、いる人は多いが、忙しい主婦にはなかなか育児書を読む時間がない。そんな「三つ子の魂百まで」

## 子育てハッピーアドバイス②

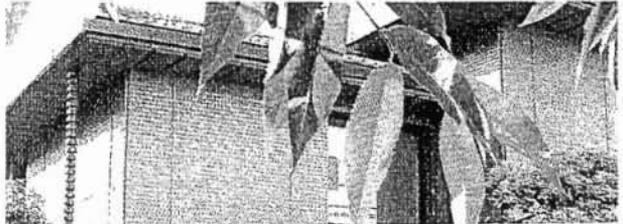
(明橋大二著)

子育ての悩みだけでなく、「おじいさん、おばあさんは、孫に、どのよう

な悩みを解消してくれるのが「子育てハッピーアドバイス」。



「熱年離婚の夫婦」



太田記念美術館の近

ちっちゃなミニ

## 太田記念美術館

重らの浮世絵 1万2000点